

学校における情報モラル教育の日常化を目指した研究

情報モラル教育研究会議

草柳 譲治¹

田中 啓介²

鹿島 俊章³

橋爪 竹志⁴

要 約

情報社会となった現代社会の中で、児童生徒は様々なメディアに触れ、当たり前のように使いこなして、新しい表現手段や文化を生み出している。しかしその反面、いわゆるネット社会におけるトラブルも多くなってきている。このような状況で、情報モラル教育を行うことが喫緊の課題として取り上げられ、文部科学省は、情報モラル教育に取り組むガイドブックとして、平成19年に『すべての先生のための「情報モラル」指導実践キックオフガイド』を作成し、すべての学校へ配布した。また「新しい学習指導要領」では、総則や道徳等において情報モラルを指導することが明記された。

本研究は学校で情報モラル教育を実践的に行うためには、「学校」ならではの有用性、「日常化」するための具体的な手立ての考案が重要だと考え、『すべての先生のための「情報モラル」指導実践キックオフガイド』を基に、研究テーマを設定し研究に臨んだ。

学校での取組における有効な場面や実施が可能な時間を考えた後、情報モラル教育を日常化するための一つのモデルプランを考え、それに沿って検証授業を行った。検証授業の結果、道徳を入り口とした実践やロング、ユニット、ショートと分けて取り組むことが、情報モラル教育をより身近なものにし、モデルプランが日常化のために有効な手立てである感触を得た。また、話し合い活動をはじめとするこれまでの学校教育活動の中で行われてきたことが、情報モラル教育を実践する上でも重要であることを再確認できた。

学校で情報モラル教育を日常化するためには、話し合い活動などを大切にしながら、モデルプランを基に取り組むことが有効であることが見えてきた。

キーワード：情報モラル、情報モラル教育モデルプラン、道徳

目 次

I 主題設定の理由・・・・・・・・・・	146	4 モデルプランの検証授業・・・・・・・・	154
1 はじめに・・・・・・・・・・	146	5 検証授業を終えて・・・・・・・・	158
2 主題設定について・・・・・・・・	147	III 研究のまとめ・・・・・・・・	159
II 研究の内容・・・・・・・・・・	148	1 研究から見えてきたこと・・・・・・・・	159
1 研究の流れ・・・・・・・・・・	148	2 今後の課題・・・・・・・・	160
2 情報モラル指導モデルカリキュラム表	148	参考文献・・・・・・・・	160
3 道徳の時間を入り口としたモデルプラン	150	指導助言者・・・・・・・・	160

¹川崎市立夢見ヶ崎小学校教諭（長期研究員）

²川崎市立平小学校教諭（研究員）

³川崎市立野川中学校教諭（研究員）

⁴川崎市立日吉中学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 はじめに

ICTの利活用は生活や社会活動の様々な場面で行われ、人々の生活を便利で豊かにしている。とりわけ児童生徒は様々なメディアに触れ、当たり前のように使いこなし、新しい表現手法や文化を生み出している。しかしその反面、いわゆるネット社会におけるトラブルも多くなり、ニュースで頻繁に取り上げられている。政府もそうした問題に対して現在、法整備を進めている最中である。

児童生徒のネット社会におけるトラブルについて、川崎市では平成20年5月「平成19年から現在までの『学校裏サイト』等でのトラブルについて」の調査を行った。その結果、「学校裏サイトでトラブルにつながる書き込みがあった」と半数以上の中学校から報告された。また、学校裏サイト以外のメール等インターネット全般に関わるトラブルは、小学校では45%近く、中学校では85%以上の学校であったと報告されている。また、文部科学省では平成20年11月に「平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」を公表した。その中の「いじめの状況」では、全体としては減少したものの「パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる」という、いわゆるネットいじめは小、中、高等学校のいずれも昨年より増加した結果であった。同省はこの公表と前後して『『ネットいじめ』対応マニュアル・事例集（学校・教員向け）』を作成し発表した。

川崎市では平成17年度より市立学校の情報教育学校担当者会で、情報モラル教育全般の実施状況を把握するためのアンケートを、市内の全学校に対して行っている。アンケートによると近年はすべての学校で情報モラル教育が実施されていた。しかし、指導内容を調べてみるとトラブル回避のための対処的な指導が多い傾向が見られた。日々変化する情報社会で様々なトラブルや事件が起き、トラブルに対して対処的な指導が多いことも当然であるが、何か起きた後の対処だけでは、トラブルを未然に防ぐことはできない。

ネットいじめやネットトラブルが話題となり、情報モラル教育に取り組む機運が近年、急速に高まっている。文部科学省はこうした状況も踏まえ、情報モラル教育に関する様々な取組を実施している。その具体的な取組として、平成17年度より行っている「情報モラル等指導サポート事業」がある。そして、この事業の中の一つとして平成19年に『すべての先生のための「情報モラル」指導実践キックオフガイド』¹⁾（以下「キックオフガイド」）を作成し、全国の学校へ配布した。情報社会となった現代社会で、より良く生きていくためには、ICT活用とともにバランスよく情報モラルを育てることが、重要だと同ガイドには記されている。

本研究会議で、「児童生徒のネットトラブルは、携帯電話からのアクセスによるものが多い」ということが話題となった。そこで、研究を始めるに当たり、対象校の現状を知るために、小学5年生1校3クラス96名、中学2年生2校2クラス83名で、携帯電話をどのように使用しているかのアンケートを実施した。

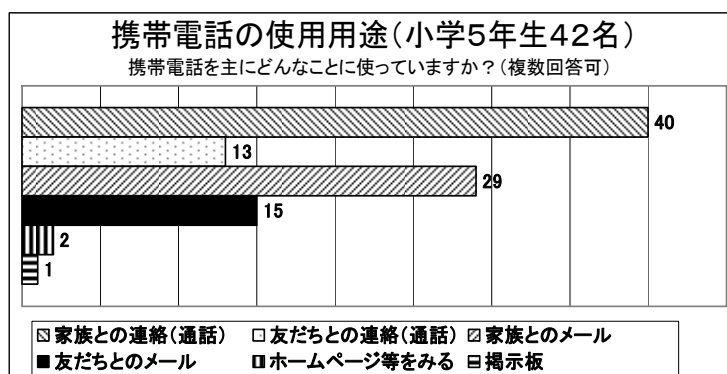


図1 携帯電話の使用用途(小学5年生)

図1は小学5年生の結果である。携帯電話を所有している児童は全体の44%(42名)で、その多く

¹⁾ 社団法人 日本教育工学振興会『すべての先生のための「情報モラル」指導実践キックオフガイド』2007年

は、主に家族との通話に利用していた。また友達に関しては通話よりメールの利用の方が多くなる傾向となっている。図2は中学2年生の結果である。携帯電話を所有している生徒は全体の72%（60名）で、こちらは友達とのメールに使用していることが多く、さらにホームページの閲覧や掲示板利用をしている生徒も複数いることがわかった。これらの結果より、児童生徒は

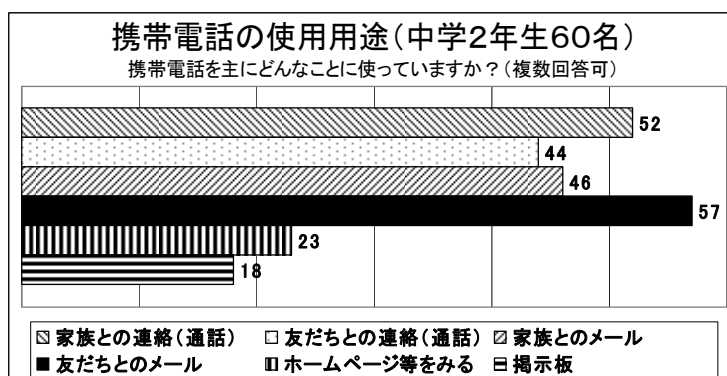


図2 携帯電話の使用用途(中学2年生)

友達同士の間では通話よりメールの利用の方が多く、その数は中学生になるにつれて急激に増えていることがわかった。児童生徒は携帯電話を通話だけをする電話としてではなく、メールやホームページ閲覧ができる情報端末機(ケータイ)として使用していることもわかった。今日的なトラブルの多くも、ケータイ端末機としての使用が多いことを考えれば、当然、児童生徒のケータイ使用時には、何らかのルールが必要ではないかと考えた。そこで、家庭でのケータイに関するルールの有無を調べてみた。

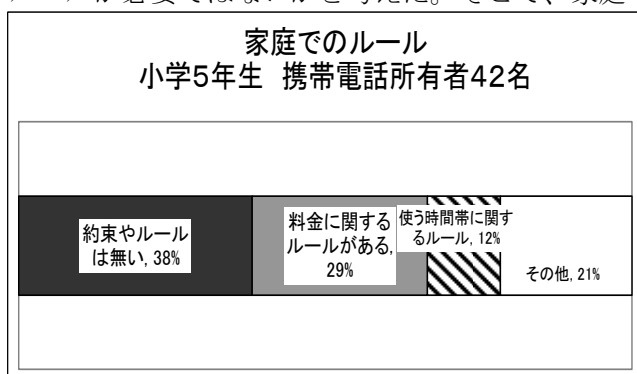


図3 家庭での携帯電話に関するルール小学5年生

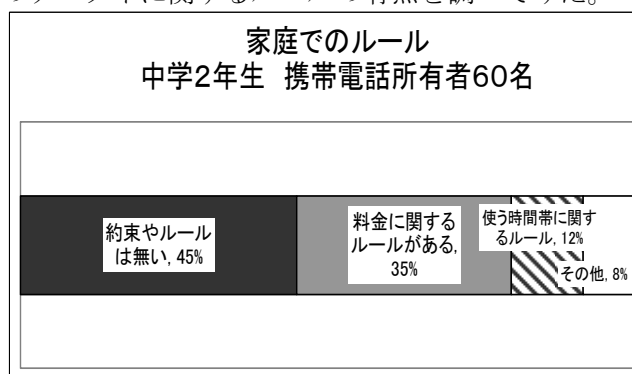


図4 家庭での携帯電話に関するルール中学2年生

上記の図3や図4のとおり携帯電話を持っている児童生徒のうち、家庭でのルールが無い状態が小学5年生では38%、中学2年生では45%もあることがわかった。さらに近年、携帯電話の料金が定額制になっている傾向を考えると、料金に関するルールというものはいずれもあまり意味を持たないものとなると考えられる。つまり実質ルールが無い状態は、小学5年生で67%、中学2年生で80%にもなるということがアンケートから読み取ることができた。今日、児童生徒が直面しているネット問題は、ルールの無い中での使用が関係しているのではないかという意見が研究会議で出た。

2 主題設定について

平成21年度より「新しい学習指導要領」の一部が先行実施されていく。その中でも総則や道徳の中で情報モラルを指導していくことが小学校でも中学校でも明記されている。そして指導をサポートする「キックオフガイド」等の資料や教材が示され、様々なセミナーや研修で取組方について盛んに紹介されている。しかし、実際に学校で実践するためには、児童生徒の実態を踏まえた上で、より容易に日常的に取り組める方法が必要であり、情報モラル教育を実践するためのわかりやすいモデルプランを作成すべきではないかと考えた。そして、これまでの教育活動の延長の中で、モデルプランを基として、日常的に情報モラル教育に取り組むことができれば、児童生徒の情報社会で正しく生きる力が育つと考え、本研究主題を次のように設定した。

学校における情報モラル教育の日常化を目指した研究

II 研究の内容

1 研究の流れ

①情報モラル教育の情報収集

研究主題に関わる参考文献や資料を収集しながら、各研究機関や各教育委員会における情報モラル教育の方策や実践例を基に、これまでの情報モラル教育の現状について把握した。

②情報モラル教育を実践するためのモデルプランの作成

多くの教員が学校で情報モラル教育を実施するための手立てを、児童生徒の実態や「新しい学習指導要領」などを基に考え、日常的に行えるようなプランを検討し作成した。

③モデルプランに基づいた授業実践

モデルプランの有用性を検証するため、小学5年生と中学2年生で検証授業を行った。

④モデルプランの検証と課題の整理

検証授業のふり返りを基に、モデルプランの有用性を検証した。

2 情報モラル指導モデルカリキュラム表

学校における情報モラル教育の具体的な指導を検討するにあたり、前述した「キックオフガイド」の活用を考えた。「キックオフガイド」は、情報モラル教育を実践するにあたってのよき案内役、つまりガイドブックである。「キックオフガイド」は、はじめての教員でも簡単に理解できる実践事例を含んでいるとともに、「情報モラル指導モデルカリキュラム」（以下モデルカリキュラム）を掲載している。「モデルカリキュラム」は、体系的に整理されている。小学校1～2年、小学校3～4年、小学校5～6年、中学校、そして高等学校と5つの発達段階に分け、さらに5つの項目に分類し、発達段階に応じた指導に必要なことを具体的にかつ明確に示している。

その5つの分類項目は以下である。

1. 情報社会の倫理

2. 法の理解と遵守

3. 安全への知恵

4. 情報セキュリティ

5. 公共的なネットワーク社会の構築

これらの分類項目の内容を詳しく見ていくと、発達段階に応じた指導の系統性の大切さがより鮮明になってくる。例えば、「情報社会の倫理」についての中の一つの例を小学校1～2年から中学校へとたどって見ていくと次のようになる。

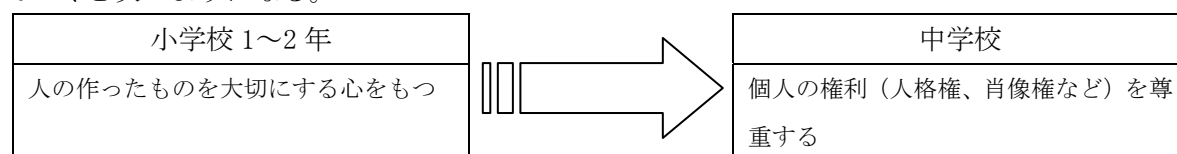


図5 「モデルカリキュラム」の例1

図5は、人やものについて、具体的なことを大事にすることが、やがては抽象的な概念である自他の権利を大事にすることにつながることを示している。中学校でいきなり個人の権利を指導するのではなく、小学校1～2年から具体的でわかりやすい「ものを大切にする」ことを土台として心を養い、体系的に育てていくことの重要性を示している。

また、「安全への知恵」では次のように示している。

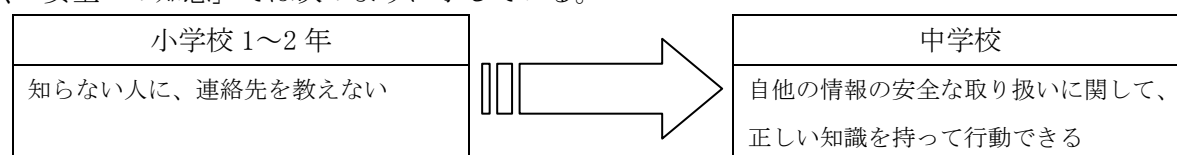


図6 「モデルカリキュラム」の例2

図6は、前述の例とはやや異なる部分もある。こちらは体系的ではあるが、生活に密着した環境に合わせて教えていく部分である。近年、小学1年生から、知らない人に自分の住所や電話番号等を教えてはいけない指導や呼びかけを実施している。これは、小学1年生が個人情報という意味を理解することや教えてはいけない理由を理解することに重点をおいているのではなく、教えないという安全面での指導に重点がおかれているということである。逆に、中学生になると知識や態度面だけではなくその理由を理解させ、様々な状況でも対応できる力を養う。両者ともに発達段階に応じて情報社会の中で安全に生きていくための、いわば状況に応じた必要な対処の仕方の指導であることを示している。

以上の2つの例からも、情報モラル教育には心を“育てる”部分と知識を“教える”部分があることが見てくる。さらに5つの分類項目は「キックオフガイド」を解説しているWebサイト²⁾にて図7のようにまとめられている。

図7では、日常モラルの延長上に心を磨く領域として①情報社会の倫理②法の理解と遵守があり、近年の多様な問題から安全に身を守るために知恵を磨く領域として③安全への知恵④情報セキュリティがあるとしている。そして、心と知恵を磨いた上で情報社会の中で適切に判断し行動するものとして⑤公共的なネットワーク社会の構築ができる態度を養うものとしている。

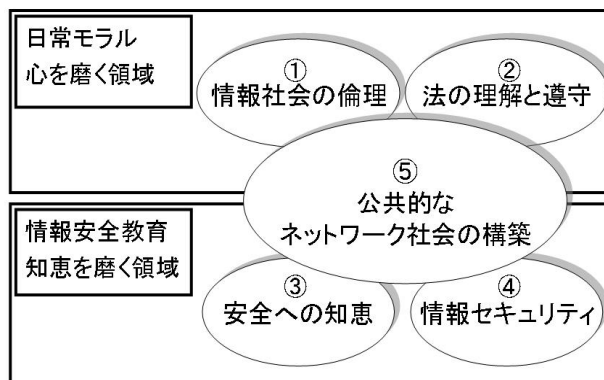


図7 情報モラルの5つの領域

また、このWebサイトでは、心を磨く領域を「不易」の部分、知恵を磨く領域を「流行」の部分とし、不易とはいつの時代も変わらぬもの、流行とは時代とともに変化するものと定義している。そして不易と流行の両方をバランスよく指導することにより、主体的な判断力が養われると記されている。加えて情報モラルは、学校全体で取り組んでこそ効果があり有効であるとも解説している。学年間・学級間の取組の差があると、体系的な指導ができない。体系的な指導ができないと、身につくべき基本的なモラルとスキルが身につかず、情報社会の中での開きが生まれる可能性がある。そして、その開きを生まないためにも体系的な指導が重要であり、そのためには指導計画の作成が重要であるといっている。

「モデルカリキュラム」の内容は、有意義であり、今日的な要請に丁寧に細かく応えているものである。しかし、丁寧に細かく応えているが故に、内容が多岐にわたっているため、その内容を中心に取出して、すべてを授業で扱うことは困難である。例えば5つの項目の下にある中目標では、小学校1～2年が6項目なのに対し、中学校は15項目もある。また、部分的に行う場合でも、内容の軽重のつけ方や、どこから始めてよいのか迷う可能性も多くある。そして、これまでの各学年での情報モラル教育の積み重ねがない場合には、より困難な状況さえも考えられるのではないかとということが研究会議で検討事項となった。

実際に授業やその他の時間等で行うための手立てを具体的にしていかなければならないと考えた。この「キックオフガイド」には「すべての先生のための」という言葉が記されている。より多くの先生、情報教育が得意な先生だけではなくすべての先生に、日常的に取り組んでもらうために、「新しい学習指導要領」と「キックオフガイド」の内容を土台とし、児童生徒の実態を踏まえた、実際の授業プランの手立てとなりえるモデルプランの作成を検討することにした。

²⁾ 平成19年度文部科学省委託事業『「情報モラル教育のための調査研究」における「情報モラル指導セミナーの開催等」事業』 http://sweb.nctd.go.jp/5min_moral/index.html 2008年

3 道徳の時間を入り口としたモデルプラン

(1) 「新しい学習指導要領」における情報モラル教育

平成 20 年 3 月に「新しい学習指導要領」が告示され、平成 21 年度より段階的に実施されることとなった。その中の総則では「児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにする」(小学校)「生徒が情報モラルを身に付け、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を適切かつ主体的、積極的に活用できるようにする」(中学校)と情報モラルについて明記されている。これは中央教育審議会の答申で情報モラル教育について「学校によって取り組みにばらつきが大きい」や「指導が不十分」等の課題を受けてのものである。

また道徳の中では次のように示されている。

〈道徳〉

児童(生徒)の発達の段階や特性等を考慮し、第2に示す道徳の内容との関連を踏まえて、情報モラルに関する指導に留意すること。

総則、道徳共に学校教育活動全般に関わることであり、それだけ今日における情報モラル教育の重要性が示されたものだと考えられる。とりわけ道徳に関しては小学校低学年段階からの積み重ねで育てる指導が求められている。

川崎市の道徳における情報モラル教育の実施について、平成 19 年度の市立学校の情報教育学校担当者でのアンケート結果をみると小学校では 115 校中 21 校、中学校では 51 校中 4 校で実施したことがわかった。道徳で情報モラルを指導している学校は決して多くはない。情報モラルの考え方や態度は、普通社会の考え方や態度と同じであるので、心を磨く部分では、道徳での実践が有効である。情報モラル教育の実践を道徳、つまり学校教育活動全般の中で行うことで、多くの教員がかかわり、日常的な指導の一環として効果的に行えることが考えられる。また対処的な指導ではなく心を磨く部分が大事であり、そのためにも道徳で行うための手立てを今後、考える必要性があると感じた。

(2) 道徳の時間を入り口としたモデルプラン

研究会議では「新しい学習指導要領」とりわけ道徳での内容と「モデルカリキュラム」、そして児童生徒の実態等の分析から、学校における情報モラル教育を日常化するときの現状での問題点は次のようになった。

- ・ 「モデルカリキュラム」の内容が多岐にわたっているので、何から指導してよいのか。
- ・ 「モデルカリキュラム」の内容が多すぎるので、何の時間を活用すればよいのか。

上記の問題点を受け、実際に指導を行う場面や時間を想定し、取組方を整理した。その結果、「新しい学習指導要領」で指導が明記されている道徳の時間を入り口とすることが有効ではないかと考えた。次に取組に軽重があるにせよ実際の学校で指導の可能性がある時間を考え整理した。その結果、図 8 のような取り組み方を考えた。何から取り組めばよいかという迷いに対し、モデルプランを定義し、さらに道徳を入り口にしてみるという一つの形式を検証してみることにした。また、これが学校における情報モラル教育の日常化につながる一つのモデルになりえると仮定した。図 8 に出てきて

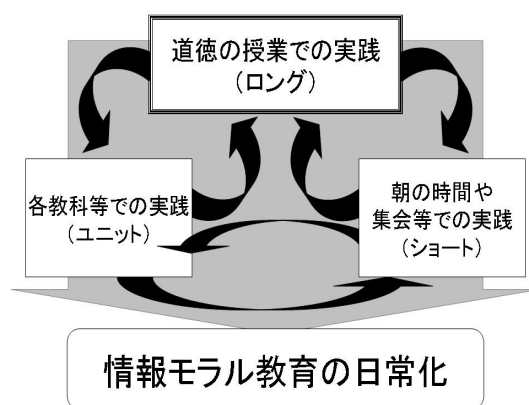


図 8 モデルプラン

いる「ユニット」という言葉は『日常の授業で学ぶ情報モラル』³⁾の中で「各教科の学習内容と関連させて、情報モラルの内容を扱う例」として記された言葉である。

ロングの時間 1時間の授業を使って情報モラル教育を取り組むものである。これは心を磨く部分である道徳の時間がふさわしいと考えた。日常モラルの延長として、自分自身のかかわりや他人とのかかわり、さらには社会とのかかわりを学ぶ中で、必然的に自他を大事にする思いが自他の情報を大事にする態度につながったり、自他の情報が他人や社会に及ぼす影響を考えて行動する実践力を養ったりしてくれるものと考えた。

ユニットの時間 1時間の授業時間をすべて使うのではなく、教科等の学習の流れの中で、ポイント的に指導することである。例えばインターネットを使う時には、ネット上のマナーやルール、そして時には危険性を指導する必要もある。また、図画工作の時間には作品の著作権や知的財産権等について短い時間に指導することもできる。これは実践的かつ日常的な指導になりえると考えた。

ショートの時間 朝の時間や帰りの時間等の短い時間で、今日的な問題に対することなどを題材にして指導することである。これは知恵を磨く部分であり、急速に変化する情報社会の中で、時には児童生徒に対して緊急的に指導をする情報安全教育が必要な場面もあると考えた。

このモデルプランが有効な手立てかどうか検証するために、まず道徳を入り口とした形式での授業で、検証してみることにした。

(3) 道徳の時間での検証授業

道徳の時間における情報モラル教育を実践する時の留意点として「新しい学習指導要領」の道徳の解説では「道徳の時間は、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深めることを通して道徳的实践力を育成する時間であるとの特質を踏まえ、例えば、情報機器の使い方やインターネットの操作、危険回避の方法やその際の行動の具体的な練習を行うことにその主眼を置くのではない」と記されている。

上記のことに留意しながら検証授業を考える上で取組を明確にするために図9のようなPDCA形式で考えてみた。児童生徒の実態把握をした後に授業プランを考え(Plan)、実際の道徳の授業を行い(Do)、児童生徒のその後の様子を見取りながら(Check)、その後の計画的な、そして時には即時的な情報モラル教育を設定していく(Action)。こうしたサイクルを設定することにより情報モラル教育が日常的なモラルの一環として推進されていく

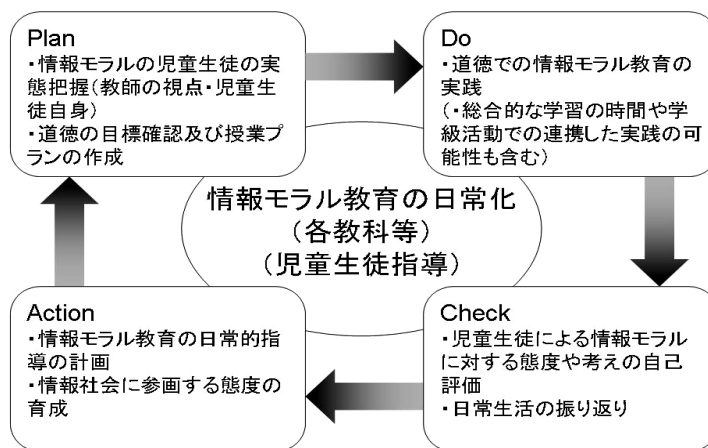


図9 道徳における情報モラル教育のPDCA

のではないかと考えた。「心を育てるような情報モラル教育を行ったことがなく自信がない」や「情報モラル教育を行っているが、情報安全的な指導だけである」というような考え方から先へ進むためには、こうした取組のモデルサイクルの提案が重要であると考えた。

さらに、実際に道徳の授業を行う際に道徳の内容項目との関連も重要ではないかと考え、内容項目と対応させる表の作成を試みた。実践との関連を明確にするために『キックオフガイド』に続く平成19年度文部科学省の委託事業として発表された「情報モラル指導ポータルサイトーやってみよう情報モ

³⁾ 中村 祐治 『日常の授業で学ぶ情報モラル』 教育出版 2007年

ラル教育」という Web サイト⁴⁾ も活用することにした。このサイトでは実践事例が 200 以上紹介されており、さらに学年や教科によって検索もできるようになっている。その検索機能を使って小学校と中学校の道徳の実践について抽出した結果、28 の実践事例（平成 20 年 12 月現在）が紹介されていた。これを作成していた対応表に組み入れた結果、表 1 のような対応表が、最終的にできた。道徳の内容項目と紹介されている実践と関連しているものを◎で記し、さらに実践事例は無いが情報モラル教育で可能と思われる内容項目については○で記した。この対応表を活用することにより、道徳の年間の計画の中で情報モラル教育を位置づけやすくするものとして有効であろうと考えた。

表 1 「モデルカリキュラム」の分類と道徳の内容項目の対応表の一部

分類	大目標	中目標	例となるキーワード	自分を育てる						他者とのかかわり							
				1-(1)	1-(2)	1-(3)	1-(4)	1-(5)	1-(6)	2-(1)	2-(2)	2-(3)	2-(4)	2-(5)	2-(6)	4-(1)	
情報社会の倫理	情報社会への参画において、責任ある態度で臨み、義務を果たす	・情報社会における自分の責任や義務について考え行動する	情報発信 掲示板 ネットいじめ 情報の信憑性			○					◎						◎
	情報に関する自分や他者の権利を理解し、尊重する	・個人の権利(人格権、肖像権など)を尊重する ・著作権などの知的財産権を尊重する	コミュニケーション 著作権 肖像権 知的財産権														○ ○ ○
法と遵守	社会は互いにルール・法律を守ることによって成り立っていることを知る	・違法な行為とは何かを知り違法だとわかった行動は絶対に行わない ・情報の保護や取り扱いに関する基本的なルールや法律の内容を知る ・契約の基本的な考え方を知りそれに伴う責任を理解する	ネットやケータイのルールとマナー 違法コピー デジタル万引き								◎						◎
安全への知恵	危機を予測し被害を予防するとともに、安全に活用する	・安全性の面から情報社会の特性を理解する ・トラブルに遭遇したとき主体的に解決を図る方法を知る				◎											
	情報を正しく安全に利用するための知識や技術を身につける	・情報の信頼性を吟味できる ・自他の情報の安全な取り扱いに関して正しい知識を持って行動できる	個人情報														
	自他の安全や健康を害するような行動を抑制できる	・健康の面に配慮した情報メディアとの関わり方を意識し行動できる ・自他の安全面に配慮した情報メディアとの関わり方を意識し行動できる	ネット依存	◎													
情	情報モラル教育																

以上のような手立てをもとにして、実際の実践として、道徳の授業における情報モラル教育が有効であるかどうかを、PDCA形式で授業を中心に考え、中学 2 年生（A 中学校）で実施をした。またその際に、実践を通して表 1 の対応表が有効な手立てであるかどうかを検証した。

Plan	事前アンケートをとり、それを基に対処表を参考に授業プランを作成する →アンケート結果より、ケータイ所有率 78%。文字だけによるトラブルの危険性についてケータイを所有している生徒の理解度は高いが、所有していない生徒の理解度は低い。
Do	道徳の授業で実施をする →ケータイを所有している生徒、所有していない生徒によるメディアの特性についての認識の違いがあるので、それを話し合いの中で意見交流をさせながら、情報モラルへの理解を広めていく。 ○道徳の内容項目 自他の尊重 2-(5)「それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものを見方や考え方があることを理解して、寛容の心をもち謙虚に他に学ぶ」 ○情報モラル指導モデルカリキュラム 情報社会の倫理 b-4-1「個人の権利（人格権、肖像権など）を尊重する」

⁴⁾平成 19 年度文部科学省委託事業『情報モラル指導ポータルサイト「やってみよう情報モラル教育」』

単元名「二者択一」(エクササイズ)

1.以下の身近なものからどちらが良いか選び自分の意見をグループの中で出し合い、意見交換をする。

本 or ケータイ小説 メール or 電話 音楽は CD or ダウンロード ケータイは安全 or 危険

〈あるグループの意見交換の様子〉

『友達に伝えるにはメールと電話どちらが良いか』の場合

「メールは打つのが面倒なので、気持ちを伝えきれない」

「メールの方が(何度も読み直せ)確認ができるから便利、それに絵文字を使えば気持ちも伝わる」

「それならメールと電話を使い分ければよいのでは？」

「でも通話よりメールの方が安いから基本はメールで良い」

「だったら長く話さなければ良いのではないか」

「それは無理だよ、たくさん伝えたいことがあるもん」

6	5	4	3	2	1	
4	1	2	0	4	4	メール
1	3	3	4	1	0	電話

2.グループの意見を全体の場で発表し、クラス全体で意見や感想を出し合う。

3.グループやクラス全体で出た意見について自分なりの考えや感想を記録する。

Check 授業後の感想やその後の生徒の様子を見取る

→ほとんどの生徒が、それぞれの価値観を話し合う中で、自分とは違う考えもあることに気づいていた。中には、自分と違う考えがある理由を「個々のこれまでのメディアとの接し方の違いから、生活や経験が違うことによるものではないか」ということに気づいている生徒もいた。

Action その後、日常化へ向けてのプランを考える

→様々なメディアについて生徒同士が話し合うことにより、教師が生徒のメディアとの接し方の実態について知ることができた。生徒の実態を知った上で、今後、道徳の時間だけではなく、適宜日常的话题の中で情報モラルを指導していくことが可能だということがわかった。

授業後の研究会議で、今回の道徳の取組について振り返り、整理を行った。

生徒の実態把握

授業の計画段階で、事前アンケートより情報モラルの知識的な部分はある程度身についているという生徒の実態は把握できていたが、態度や実践的な部分については、ケータイを持っている生徒と持っていない生徒では、操作スキルの差異による、考え方の違いがあることが把握できた。

手立てとしての対応表の効果

生徒の実態に応じて「モデルカリキュラム」から目標を選び、対応表をみながら道徳の内容項目と照らし合わせ、具体的な題材を考え授業に臨めた。それにより道徳的な価値に迫りながら情報モラルの授業が展開できた。

道徳の内容項目の達成

日々進化するメディアについて、経験のある生徒から経験のない生徒へと学びを広げることができ、すべての生徒にとっていろいろなもの見方や考え方があることの理解につながった。

上記のようなことから、道徳を入り口にすることにより、効果的な面が多々あることがわかった。特に生徒自らが、自分と様々なメディアとのつき合い方を言葉にして発することにより、教師が生徒の実態を把握でき、今後のショートやユニットでの展開を考える一助になるという効果まで確認できた。今回の授業より、道徳を入り口としてモデルプランをスタートさせる形式は、有効であることがわかった。

4 モデルプランの検証授業

	A小学校（5年生）	A中学校（2年生）
児童生徒の実態	<p>ケータイ所有率 45.5%（ロングでの実践授業時）</p> <p>ケータイ所有者と非所有者の情報モラルの知識の差が大きい。素直でまじめであるが失敗をおそれ消極的な面がある。全体の中での発言や発表は苦手だが、個々に書く文章や記録は表現豊かに書ける児童が多い。</p>	<p>ケータイ所有率 84%（ロングでの実践授業時）</p> <p>ケータイの所有率が高く、ネットショッピングやオークションの利用経験者は28%と高い。ネットにおける基本的なマナーについては理解できている生徒が多い。個のつながりに比べ全体としての意識が希薄である。</p>
ロングでの実践	<p>教科 道徳 <10月実施></p> <p>授業のねらい 相手の立場に立っての行動 文字だけのコミュニケーションの危うさの理解</p> <p>主な授業内容 事例アニメーション教材を視聴後、個々がワークシートを活用しながら実際の場面を想定し、考える。考えたことの発表やロールプレイで相手の立場や状況についてわかったことを共有し、感想を書く。</p> <p>活用教材等 事例で学ぶNet モラル『このことばで相手に気持ちが伝わるかな?』</p> <p>情報モラル指導モデルカリキュラム a2-1 相手への影響を考えて行動する</p>	<p>教科 道徳 <6月実施></p> <p>授業のねらい 個性や立場の尊重 多様な見方、考え方の理解及び寛容な心の育成</p> <p>主な授業内容 2つの事柄（例：通話 or メール）からどちらが良いかをグループで討議をする。グループで話し合ったことを全体で発表をする。全体の発表を聞きながら感想や意見交流をする。様々な意見を取り上げることにより多様な見方があることについて感想を書く。</p> <p>活用教材等 二者択一（エクササイズ）</p> <p>情報モラル指導モデルカリキュラム b4-1 個人の権利（人格権、肖像権など）を尊重する</p>
ユニットでの実践（一例）	<p>教科 国語（書写） <1月実施></p> <p>授業のねらい 意欲的に書初めに取り組み、自分や友達の良いところを見つける</p> <p>主な授業内容 書初め作品の展示時に、個々が押した落款の意味（自分の落款までが作品であり、それによりオリジナル作品になること）について教師が説明をする。個々がより思いを大事にしながら、作品発表をする。自分の作品を大事にすることと同時に人の作品も大事にすることを教える。</p> <p>情報モラル指導モデルカリキュラム b3-1 情報にも、自他の権利があることを知り、尊重する</p>	<p>教科 特別活動 <11月実施></p> <p>授業のねらい 望ましい人間関係の確立</p> <p>主な授業内容 パソコンでキーボード入力しながら、友達との待ち合わせに遅れる場合のメールを送るロールプレイを行う。続いて大人（先生）にメールを送る場合を考えロールプレイをする。2つの違いについて場面毎で大切なコミュニケーション手法やメディアの特性等を話し合う中で、相手を意識してメールをする必要性について理解させる。</p> <p>情報モラル指導モデルカリキュラム a4-1 情報社会における自分の責任や義務について考え、行動する</p>
ショートでの実践（一例）	<p>指導時間 朝の時間 <11月実施></p> <p>指導のねらい ケータイでのコミュニケーションが及ぼす人間関係のトラブルについての理解</p> <p>主な指導内容 番組を視聴後に感想交流をする。最後に担任が話をして日常の自分たちの身の回りの生活について振り返らせる。</p> <p>活用教材等 NHK「ネットいじめに向き合うために」『うちのルール』</p> <p>情報モラル指導モデルカリキュラム a3-1 他人や社会への影響を考えて行動する</p>	<p>指導時間 朝の時間 <12月実施></p> <p>指導のねらい ケータイの安全な扱い方と問題点の対処法の理解</p> <p>主な指導内容 番組を視聴後に、担任がポイントを再度確認する。</p> <p>活用教材等 NTTdocomo「ケータイ安全教室」中学生・高校生向け</p> <p>情報モラル指導モデルカリキュラム d4-1 安全性の面から、情報社会の特性を理解する</p>

表2 モデルプランの検証授業一覧

B中学校 (2年生)	考察
<p>ケータイ所有率 75% (ロングでの実践授業時)</p> <p>ネット掲示板の利用経験者が44%、ブログやプロフの利用経験者が45%いて、ケータイメール等での小さなトラブルが多々ある。</p> <p>積極的な話し合いができ、まとまりのある集団である。</p>	<p>メディア体験の差がある中、映像を中心とした教材を活用し、日常利用している児童生徒の経験や知恵を話し合いの中で共有していくことが有効だった。ネットという個が簡単に誰とでもつながるといふメディアについて、全体場で話し合うことにより、安全や安心について考えることができた。</p>
<p>教科 道徳 <6月実施></p> <p>授業のねらい 個性や立場の尊重 多様な見方、考え方の理解及び寛容な心の育成</p> <p>主な授業内容 2つの事柄(例:通話 or メール)からどちらが良いかをグループで討議をする。グループで話したことを全体で発表をする。全体の発表を聞きながら感想や意見交流をする。様々な意見を取り上げることにより多様な見方があることについて感想を書く。</p> <p>活用教材等 二者択一(エクササイズ)</p> <p>情報モラル指導モデルカリキュラム b4-1 個人の権利(人格権、肖像権など)を尊重する</p>	<p>小学5年生、中学2年生共に道徳を入り口とすることにより、自分の思いや考えを出し合い心情を育てる中で、児童生徒の実態を把握しながら授業を進めることができた。実態が把握できたことによりその後、情報モラル教育のプランを立てる際の参考になった。</p> <p>小学校においては個々のメディア経験、とりわけケータイに対しての経験差が大きく、それを補うための資料としてアニメーション教材が有効であった。</p> <p>中学校においては、エクササイズ的なことを交え、生徒たちの生活に密着した話題を出すことで、興味や関心を高められた。それにより話し合いも活発にできた。</p>
<p>教科 特別活動 <11月実施></p> <p>授業のねらい 望ましい人間関係の確立</p> <p>主な授業内容 ケータイメール型ワークシートを活用しながら、友達との待ち合わせに遅れる場合のメールを送るロールプレイを行う。続いて大人(先生)にメールを送る場合を考えロールプレイをする。2つの違いについて場面毎で大切なコミュニケーション手法やメディアの特性等を話し合う中で、相手を意識するマナーと、大事な用件は直接確認する態度を養う。</p> <p>情報モラル指導モデルカリキュラム a4-1 情報社会における自分の責任や義務について考え、行動する</p>	<p>ユニットにおいては、教科等の目標を達成する中で、補助的に情報モラルやそれに関連するメディアを用いることが効果的であり、スマートに実践できることがわかった。</p> <p>小学5年生の国語(書写)の実践にあるように、これまで行っていた教育活動に、少し言葉を加えたり少し活動を広げたりすれば、情報モラル教育になることが多いことも再確認した。こうした授業プランを組むためにも実態把握ができる道徳を入り口した実践の有効性もあらためて気づかされた。</p> <p>中学校では、道徳で行った時と同様、話し合いを主として行うことにより個性を活かしながら、学級の集団づくりにも役立つ情報モラル教育の授業の可能性も感じられた。</p>
<p>指導時間 冬季休業前(学級活動) <12月実施></p> <p>指導のねらい ネットショッピングやオークションにおける特性や危険性についての理解</p> <p>主な指導内容 実際の事件や事例を紹介しながら、ネットショッピングやネットオークションを利用する時の注意点を理解させる。</p> <p>情報モラル指導モデルカリキュラム e4-1 情報の信頼性を吟味できる</p>	<p>ロングやユニットによる実践の積み重ね後のショートの実践は、教師も児童生徒も情報モラルに対する意識が高まっているので、アニメーションや映像教材を見せるだけでも効果的であることが明らかになった。</p> <p>情報モラル教育が日常的に行われていれば、児童生徒の生活の変化によるトラブルや日々変化する世の中の様々な事件等にも対応した指導が、短い時間の中で効果的に行える可能性が伺えた。B中学校のように、実態を把握できた中でタイミングよく指導することによって、未然にトラブルに巻き込まれない指導も可能だとわかった。</p>

表2のように対象校3校でロング、ユニット、ショートとモデルプランの検証授業を行った。A小学校とB中学校の授業の具体的な内容は以下である。

A小学校（小学5年生）

<資料について>

事例で学ぶNetモラル「文字だけで伝える楽しさや難しさ」

あきはドッジボールが得意だが、同じチームのみゆとじゅんは苦手である。そこで、あきはドッジボールの練習をすることにした。みゆからは電話で「いいよ」じゅんからはメールで「いいよ」という返事が来たのだが当日練習に、やって来たのはみゆだけで、じゅんは来ない。みゆとじゅんの行動の違いから、誤解を受けてしまった理由やどうするべきだったかを考え、自分たちは今後どのようなことに気を付けるべきかを考えさせたい。

<本時の展開>

学習活動ならびに基本発問	教師の支援と留意点
<p>1 資料「文字だけで伝える楽しさや難しさ」の映像を視聴後「いいよ」という同じ返事なのに、意味が違ったことを確認する。</p> <p>○あきはどのように特訓に誘ったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうしても勝ちたいから ・友だちにもうまくなってほしい <p>○誘われたみゆとじゅんは、どんな気持ちでしたか？（ワークシートに書き込む）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分もあきらのように上手になりたい ・せつかく誘ってくれたから、行かないと悪い ・苦手だから行きたくない <p>○じゅんが練習に来なかった時、あきらとみゆは、どんな気持ちでしたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「いいよ」と言ったのに来ないなんて。 ・チームが優勝できなくなるかもしれない。 ・なにかあったのかな <p>○詰め寄った時のあきはどんな気持ちでしたか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なんで来なかったんだよ ・みんなで練習しなきゃ意味がない。 <p>2 みゆとじゅんが使った「いいよ」の意味を考える</p> <p>○じゅんとあきらの間には、どうして誤解が生まれたのだろう（ワークシートに書き込む）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じ言葉だけど意味が違う <p>3 じゅんはきちんと気持ちを伝えるために、何に気を付ければよかったのかを考える。</p> <p>○じゅんはどうすれば誤解をまねかなかったのでしょうか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・直接会って話せばいい ・電話で話せばよかった ・メールに詳しく書けば、誤解されなかった ・あきらもちやんと確かめればよかった <p>4 本時の振り返りを書く</p> <p>5 教師の話聞いてまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話の流れを振り返りながらキーシーンを提示する。 ・ ワークシートを配布し、それぞれの気持ちに共感できるようにする。 ・ 同じ「いいよ」という返事だったけれども、意味が違ったために誤解をまねく結果になったことを確認する。 ・ みゆの「いいよ」（許諾）とじゅんの「いいよ」（拒否）の意味を考え、じゅんのメールを添削する。 ・ 文字だけで気持ちを伝えることの難しさについて確認し、顔の表情や言葉の調子で気持ちがわかる。直接話をするよさについて話す。

まず、入り口である道徳での実践を始めるに当たり、実態アンケートを行った。その結果、自分専用のケータイを所有している児童が45.5%と多く、中には様々な機能を使っている児童もいた。また、持っていない児童のほとんどが、今後ケータイを所有したいと考えていることもわかった。しかし、この時点でケータイを所有している児童としていない児童では、やはり感覚や知識に差があると担任の個別の聞き取りによりわかった。そこでアニメーション教材「事例で学ぶNetモラル」⁵⁾を活用することにより、同じ資料の上で考えを共有することで、経験の差を縮めることを考えた。加えて、これまでの積み上げが無いので「モデルカリキュラム」の中学年レベルの目標を設定し、左記のような指導案で授業を展開した。授業後の児童の感想は以下のようなものがあつた。

「私もメールをすることがあるので文を確かめてからおくろうと思ったし、できるだけ電話にしようと思いました。言葉は大切だとわかりました。」

「これからメールをすると思うので、言葉をきちんと選んで一回見直しをした方がいいなと思った。」

検証後には、そのアニメーション教材とワークシートをセットにして同学年の他の2クラスの教師にも実践してもらった。その授業後の感想が以下である。

「友達にさそわれたら電話でこたえるのがいいけど、もしメールなど声が聞けない時は自分の気持ちが相手に伝わるように書こうと思う。」

「私は電話する方で、メールではないのですが、メールができるようになったら『いいよ』などの同じ言葉で、違う意味の言葉は気をつけようと思いました。」

児童や教師が代わっても同じような感想が得られたことは、アニメーションとワークシート等がセットになったパッケージ教材は、誰でも手軽に情報モラル教育ができる可能性が高いと思われる。

実態把握アンケートを元にしたロングでの授業実践を終えた後は、そこで児童生徒のメディアに対す

5) 堀田 龍也 企画・監修 『事例で学ぶ Net モラル』 広島県教科用図書販売株式会社 2008年

る実態を把握できたことを活かして必要に応じて情報モラル教育を日常的に取り組むことができた。

ユニットの実践では書初めの展示時に落款を使用する意味について教え、自分の作品や友達作品を大事にする心情を育てつつ著作権教育の第1歩へとつなげる効果的な実践が気軽にできた。

さらに教師も児童も情報モラルを日常的に考えられるようになると、映像教材をみせ、簡単な感想交流をし、最後に教師が指導するというような手軽なショートの実践も可能になった。

B 中学校（中学2年生）

B中学校では積極的な話し合いができるという実態と個々によりメディア経験の差があるという実態を考慮した上で、A中学校同様に道徳の授業で「二者択一」の実践を行った。活発な意見を出し合う中で生徒のメディアに対する実態を把握しながら授業を展開することができた。

その後、ケータイやネットならではのコミュニケーションが頻繁に行われる生活の中で、様々なトラブルに直面しそうだ予測し、「望ましい人間関係の確立」をねらい、特別活動で授業プランを立てた。

題材名 「メールで伝えよう」

題材のねらい

- ・ 相手を意識し、友達同士のメール、目上の人に対してのメールについて考える。
- ・ 大事なことは確認をしたり、しっかり伝えたりする態度を身につける。

本時の目標

- ・ 目的、相手よりのメールのマナーを身につける
- ・ 大切な用件はメールではなく、直接相談しようとする態度を身につけさせる。

活動の導入

<発問> 友達の日吉さんとセンター北で映画を見る約束をしていた私。しかし、寝坊をしてしまい上映時間に30分遅れてしまいそう。あわてて家を飛び出した。日吉さんにメールしよう。

友達に出すメールについて発問の回答をワークシートに記入後、数名の答えを発表してもらい自他を比較し、共有をする。

活動の展開

<発問> 中学3年生の私は高校進学先を悩んでいた。入学願書は明日1月21日(月)に提出しなければならない。ずっとM高校に進学を希望していたが、家族と話し合った結果、N高校に急に変更する決心をした。そして、担任の先生へ電話したがつながらなかったため、年賀状に先生のメールアドレスがのっていたことを思いだし、メールを出すことにした。時間は1月20日の日曜日の夜8時だった。

大人（担任の先生）に出すメールについてワークシートに記入後、数名の答えを発表してもらい自他と比較をし、共有をする。

まとめ

友達に対してと大人（担任の先生）に対してのメールの違いが必要であることを考えさせる。その後、どちらに対しても大事なことは直接話した方が確実であることに気づかせる。

上記の活動の中で生徒が、より関心を高めて活動に取り組めるよう図10のようなケータイメール型ワークシートを自作し用いた。これにより生徒は発問に対して、より身近なこととしてとらえ取り組むことができた。また直接記入できるので普段自分たちが使用している絵文字や顔文字、記号なども自由に書き込めたので、意欲的に取り組んでいた。活動後の生徒たちの感想は次のようなものがあった。



図10 ケータイメール型ワークシート

「メールの利点はあるが、一番いいのは直接会って話すことだと今日の授業でわかった。」
 「メールは便利だけれど相手が確実に内容をみるということは（確認が）できないため直接会うか電話をしなければいけないなあと思った。」
 「メールに対しての考えが少し変わった…。人それぞれ打ち方ややり方が違うなと思いました。」
 「みんなのその場の対応がどんなものになるのか知れておもしろかった。『へえー』と思った。」
 「今回みんながいつもどういうメールをするのかを知れたのすごく良かったです。」

生徒たちは友達同士の中で当たり前のように使用していたケータイメールについて、時と場合や相手の気持ちを考え、メディアや伝達手段を選んだりするきっかけとなる実践となった。「望ましい人間関係の確立」をする上で、多くの生徒たちの生活の中に入り込んでいるケータイを扱うことにより、生徒たちの生活の中で実感ができる授業内容となっていた。

その後、ショートの実践として長期休業である冬休み前にネットショッピングやオークションについて、その特性を指導し注意喚起をする実践をした。ネットショッピングやオークションにおけるトラブルや事件の記事を基に話をし、既に利用経験のある生徒から話

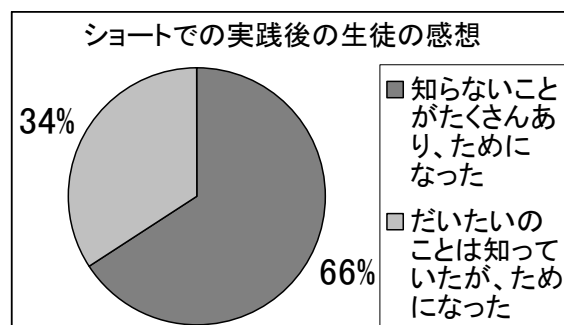


図 11 ショートでの実践後の生徒の感想

も聞いてみた。危険なことがあることを理解している生徒は多かったが、具体的に何が危険かを説明できる生徒は少なかった。実践後の生徒の感想から図 11 のように全員にとって有効であることがわかった。また、危険という認識だけではなく「同じものなら安いから、(店を) 選べば賢く買える」「時間が無い時には便利」というような利用に対しての有効な活用についての意見も出ていた。

このショートの実践の成果は「道徳を入り口として日常的に取り組んだことで、メディアの特性やネットの特性に気づいた上で生徒が情報の伝達手段を選択する力が身につけてきているからだ」という意見が研究会議内で出た。つまりモデルプランを基に実践を日常的、継続的に取り組むことにより、生徒の情報モラルに対する意識の高まりが見えたのではないかという意見でまとまった。

5 検証授業を終えて

学校における情報モラル教育の日常化を行う時の問題点として考えていたことについて、次のような考察ができた。

- ・「モデルカリキュラム」の内容が多岐にわたっているの、何から指導してよいのか。

道徳を入り口にするというスタイルのモデルプランを作成したことにより、個々の実態を把握しながら道徳で情報モラル教育の日常化へ向けての第1歩を考えた。そして小学5年生、中学2年生で共に児童生徒が日ごろ慣れ親しんでいるケータイをはじめとするメディアについて、活発な意見を出す中で授業が進み、実態把握もでき、その後のユニットやショートの実践を考える一助にもなった。また、道徳のプランを考える際に活用した内容項目との対応表も、手立てとして成り立つことが授業者の感想からもわかった。

道徳を入り口としたロングの実践の後に、ユニットやショートでの実践をいくつか行い、モデルプランに沿った日常化へ向けた積み重ねをすることができた。これはロングで実践をしたことにより児童生徒の関心が高まると同時に教師の関心も高まり、ユニットやショートの実践を日常的に行うことを考えるようになったからだ。

・「モデルカリキュラム」の内容が多すぎ、何の時間を活用すればよいのか。

ロングで行った後は、児童生徒の実態や社会的な状況を考慮しながら、ユニットやショートを上手に日常の授業の延長をはじめとする学校教育活動の中で行うことが有効だとわかった。児童生徒側も教師側も日常化が定着してからのショートの実践では、映像教材を見せたり新聞等の記事を紹介したりするだけでも効果があることが、指導後の感想等でも明らかになっていた。

以上のことから、本研究会議でテーマとしていた情報モラル教育の日常化には、モデルプランを活用することが有効であるとわかった。

検証授業をすべて終えた後に、研究会議の話し合いの中で、情報モラル教育の授業を行う時に、話し合い活動が有効であるという意見が出た。確かに検証授業で行った実践の多くに話し合い活動は組み入れられている。話し合い活動が有効な理由として、ネットという家庭によって様々な差があったり個で扱うことが多かたりするメディアに対して、学校で話し合うことにより、直接相手の顔が見える安心感の中で、個々のもつ意見や考えを認め合い吸収し合うことができるからであろうということになった。それはB中学校のユニットでの実践後の生徒の感想「今回みんながいつもどういうメールをするのかを知れたのですごく良かったです」という一例から見取ることができる。学校という場での話し合い活動が、情報モラル教育で有効だということから、やはり学校で情報モラル教育を扱う意味があることが再確認できた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から見えてきたこと

本研究を行ってきたことにより、情報モラル教育について以下のことが見えてきた。

○ 情報モラル教育は「流行」を題材として「不易」を教え育てることが有効である。

情報モラル教育の実際の授業を考え、実行する際には、児童生徒の興味や関心を高めるために、児童生徒が話題としている「流行」を題材にして、判断の基になる「不易」を教え育てることが有効であることが、検証授業を通じてわかった。

○ これまでの学校教育活動の延長で「不易」を教え育てるという考えが大事である。

「不易」を教え育てるには、道徳をはじめとする、これまで学校教育が行ってきた価値観そのものが大切であることが確認できた。とりわけ大切なことは、検証授業で数回行ったような話し合い活動で、一人一人が授業に積極的に参加している姿からもわかった。しかし、行う前提として、話し合いができる学級、つまり日常モラルも並行して育てていることが大事である。これらの内容に「新しい学習指導要領」を組み入れることで、より今日的な実践へつながるであろうことも今回の実践から見えてきた。

日々進化する様々な情報メディアがある中、それらすべてに対応するのは困難かもしれない。しかし、これまでの学校教育の中で行われてきた話し合い活動や、道徳の授業、教科等の実践を少しだけ延長することにより、情報モラル教育は日常化され、児童生徒が情報社会でよりよく生きる態度の育成へとつながることが、今回の研究を通してわかった。児童生徒の実態や社会の流れに合わせて、小さな実践を積み重ねていくことが、情報社会となった現代社会での児童生徒指導であると考えられる。そう考えると日常化は当然であり、情報モラル教育は、新しい時代に対応した、生きる力の育成の一部であると、あらためて感じた。

2 今後の課題

今回の実践で、「モデルカリキュラム」の対象レベル（対象学年）の目標のすべてを実践することはできなかった。特に「安全への知恵」や「情報セキュリティ」という知恵を磨く部分については、ユニットやショートでさらなる実践の積み重ねが必要かと考えられる。こうした取組ができなかった一因としては、児童生徒がこれまで情報モラルについての積み重ねが無いことから、定着するまでに時間がかかったことがあげられる。日常モラルの延長である心を磨く部分については、日常の学校教育活動で育っているので取り組みやすいが、情報安全教育である知恵を磨く部分については、児童生徒のメディア経験の差を考慮した授業が組みにくかった。また、モデルプランを活用したにせよ、すべてを行うだけの時間が無かったことも挙げられる。この部分に関しては、モデルプランをよりよく活用するため、ユニットやショートの実践の積み重ねが、今後は特に必要だと考えられる。今回は道徳を入り口として考えたが、ユニットやショートを入り口にするなど、多様なモデルプランの活用スタイルも視野に入れて、情報モラル教育の日常化をより充実させる必要性もある。

学校における情報モラル教育ということで研究を進めてきたが、情報モラル教育全体を考えると、家庭や地域社会との連携が必要なことは自明のことである。この部分も、これから先、検討が不可欠だとより切実に感じられた。

今後、よりメディアを身近に感じ、より自由に扱える児童生徒が増えていくことを考えると、本研究を基にさらなる実践例の蓄積や方法例を示していかなければならないと考える。他の学校教育活動同様、情報モラル教育も、社会の変化や児童生徒の実態に応じた実践を積み重ね続けることにより、取組が容易になり、充実したものになると本研究を通して思った。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言を下さりました講師の先生方、また、研究員の所属校の校長先生をはじめ教職員の皆様に、心より感謝し、厚くお礼申しあげます。

【参考文献】

- 堀田 龍也 『事例で学ぶ Net モラル～教室で誰でもできる情報モラル教育～』 三省堂 2006 年
 社団法人 日本教育工学振興会 『すべての先生のための「情報モラル」指導実践キックオフガイド』
 2007 年
- 中村 祐治 『日常の授業で学ぶ情報モラル』 教育出版 2007 年
- 加藤 宣行・毛内 嘉威 『学級担任が自信をもって行う道徳教育』 学事出版 2008 年
- 教育情報化推進協議会 『教員の ICT 活用能力向上／研修テキスト 2008』 2008 年
- 日本放送協会 「NHKテレビ・ラジオ学校放送」 日本放送出版協会 2008 年

【指導助言者】

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 目白大学教授（川崎市総合教育センター専門員） | 原 克彦 |
| 大阪教育大学教授 | 木原 俊行 |
| 川崎市立小学校情報教育研究会長（川崎市立下沼部小学校長） | 秋場 尚樹 |
| 川崎市立中学校教育研究会情報教育部会長（川崎市立西高津中学校長） | 岡島 広幸 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 辰口 直美 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 増田 実 |